

profile

かみじょう・みさと●1990(平成2)年、福岡県生まれ。大学院の国際環境工学研究科を終了。前田建設工業(株)に構造設計職として入社後、現場勤務を経て、物流倉庫などの構造設計を担当。現在も設計職として、ショッピングモール建設のプロジェクトなどに携わっている。



「学生時代の構造の研究って、ずっと数式を扱っているだけでした」という上條。入社してから構造設計の実務に触れ、やり方の違いに最初は驚いたという。

「例えば、今手元にあるシャープペンシル。これはどんなニーズに合わせてデザインされているのか。どんな機能を重視して設計されているのか。たった一本のシャープペンシルをつくるだけでも様々な考えが施されているんですよ。その面白さに最初に気が付いたのは、中学生の頃でした」
上條がデザインに興味を持ったのは、美術の授業中。学生時代にプロダクトデザインを学んだという美術教員の話がきっかけだった。どんなに身近な製品でも、緻密に考えられたものづくりのプロセスがあることを知り、デザインや設計などの仕事を自分もやってみたいと考えるようになった。
プロダクトデザインに興味の入口だった上條。これを学ぶためには、美術大学など芸術系の大学、もしくはデザイン系の専門学校へ進学するのが一般的だ。上條は初め美術大学の受験を考

えていたが、進学先には工学部を選んだ。その理由は決して積極的なものではなかったが、最終的には自ら納得して決めた。
「美大の受験には実技など美大特有の試験科目があって、本格的に受験を考え出した時には、もうイチから対策しても間に合わない時期でした。最初は『諦める』という意識があったと思います。でも、立体物のデザインに携わりたのなら、プロダクトだけじゃなくて建物という道もあるぞって気付いて。当初は選択肢になかったものの、工学部で設計を学ぶことで、今まで知らなかった新たな面白さがあることがわかり、この道に進むことを決めました」
大学進学の時だけではない。思考や選択がいつも柔軟で、状況に合わせて面白さを見出せるのが上條の強みだ。
大学時代に、志望していた意匠設計のゼミの選考に落ちてしまった時は、構造設計という新たなフィールドがあることを見つけ、将来的にやってみたいと思うようになるまで打ち込めた。就職してからも、現場なら現場の、設計では設計の、それぞれでのやりがいを見ることが出来る。
「振り返ると、この選択でよかったんだと思えることばかりです」という彼女の言葉に嘘はない。進む道が望んだものでも、そうでなくても、いつもプラスにとらえ、自らの血肉にしてきた過去が、彼女にはあるのだ。

どんな選択も振り返ればよかったと感じる

機能性、安全性、経済性。構造設計職に期待されることは多いけれど、それに加えて、「構造設計であっても、意匠性を忘れてはならない」という強い信念を抱いている上條美里さん。構造設計でありながら、意匠設計を強く意識する、彼女のモットーの起源をたどる。

「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

輝け! けんせつ小町

構造設計

上條美里

前田建設工業株式会社
建築事業本部 構造設計部 構造第1グループ



「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。



my Beginning

私が建設業に入った理由

デザインのちからを建物にも



左上/ 設計職仲間には、同じ大学の先輩も。

右上/ 現在上條が所属するチームのメンバー。上司である櫻井チーム長(写真前列中央)は、「今回のショッピングモールの案件で、上條は大きく成長した」と評価する。先輩や上司から指示されるままに動くのではなく、自分なりの意見を言えるようになった彼女は、プロジェクト前とは別人だ。

右下/ 自席のサイドテーブルで急遽ミーティングが開かれることもある。



些細なことでも逐一共有の時間を取るほうが結果的に業務効率アップにつながるというのが、チームの方針だ。

my Growing

私が建設業界で学んだこと

構造の先には、見る人の気持ちがある

図面で人の気持ちはわからない

設計には、大きく分けて三つの分野が存在する。意匠設計、設備設計、そして上條の携わる構造設計だ。しかし、どの設計を生業としていても、全員が意識するのは「意匠性」。彼女は、入社して最初に受けた研修で、そのことを先輩から教わった。

「設備設計の人も構造設計の人も、意匠については、『いつも忘れてはいけない』と言っていました。その時は特別な印象を抱いていたわけではなかったのですが、入社後のあるプロジェクトを経験してから、強く考えるようになったんです」

上條がその経験をしたのは、入社三年目で構造設計を担当したとあるプロジェクト。設計図面を彼女が作成し、機能面でも安全面でも、そつなくプロジェクトを進めることができた。しかし、竣工した建物を見た彼女は、忘れられない後悔をすることになる。

「建物のひさしがね、あまりスタイリッシュではなかったんですよ。ショックでした。訪れた人が最初に目にする部分でもあるのに、すごく圧迫感のあるもので。構造設計上は、何の問題もない。でも、実際に人が見た時にどう感じるかを考えることができていなかったんですよ。そこで、最初の研修で言われた『意匠性を意識せよ』という教えがいかに大切だったかに

気付かされたんです」

図面や数式を操るのが仕事の構造設計。しかし、どれだけそれらの経験を積んでも、人がどう感じるかは実際に自らが体感しないとわからない。そして、建物は人が使つてこそそのものだから、人の感覚は重視されなければならない。「このことに気付いて、以降は必ず『これって初めて見た人はどう思うかな』とか『来たいと思える建物かな』といった視点を忘れないようにしています」

構造設計に、ワクワクを

上條には、将来の夢がある。それは見る人や訪れる人がワクワクできるような建物の設計を自分自身で手掛けることだ。

「誰かに『カッコいいなあ』『よくできてるなあ』と思ってもらえるようなものがつくりたいんです。構造設計だからこそ、やってみたいと思う。安全性や機能性だけでなく、建物そのものも楽しんでもらえるようなものがいいですね」

彼女が現在担当しているのは、大型ショッピングモール。すでに着工しており、施工図のチェックや、現場に赴いて検査などを行うのが彼女の仕事だ。大型の商業施設の場合、構造物がダイレクトに見えることが多く、特に見え方に気を遣う必要がある。ここに難しさと面白さがあるという。「今のプロジェクトは、竣工した



チーム外の同世代社員との交流も盛んだ。建築模型をはさみ、活発に意見を交わす。

my style

夏季休暇にはイギリスを旅行し、ロンドンや郊外にあるケンブリッジを観光しました。どちらも至る所に歴史が感じられ、街を歩くだけで英気が養われました。国会議事堂とビッグベンはいにく一部改修中でしたが、建物の形状や装飾に議事堂としての威厳が感じられて圧倒されました。



ウェストミンスター橋上から国会議事堂とビッグベンを眺める

ら、これまでの私のなかでは間違いなく忘れられない仕事のひとつになるはずだ」と語る表情からは、仕事の充実ぶりと自信が感じられる。これまでに経験した現場と比べても、もっとも大規模なプロジェクトとなり、携わる期間も長い。そして何より、ワクワクするものがつくりたいと望む彼女にとって、ショッピングモールという、人々を楽しませるための空間は、特別な思い入れがあるのかもしれない。

昨年には、一級建築士の資格も取得した上、社内ではまだ若手という立ち位置ではありながらも、実力と独自のポリシーをもって、これまでなかった新しい「構造設計」の役割を業界に示してくれるはずだ。

my Growing 私が建設業界で学んだこと